# 「仙人」考

## ―「今昔物語集」を中心として―

安東大隆

「今昔物語集」を読んでみると、仙人に関する説話が、いくつかある。ところが、それらの説話の中に、あらわれている仙人像というものは、中国でいう仙人像とは、趣を異にしている。その点を明らかにしつつ、本朝の仙人像を「今昔物語集」を中心にして、考察してみたい。

仙人（神仙）は、人間の本質的、現実的欲望を、具体的な形で実践させたものと、考えられる。

神仙思想とは、中国において発生した起源の古い民間信仰の一つである。

中国の漢民族は、いうまでもなく現実的傾向の強い民族である。そして、人間は誰でも幸福な生活を営むことを望むものであるが、漢民族はとくに富貴と長生を最大願望にあげていた。紀元前三―四世紀の周末の動乱期、いわゆる戦国時代は、社会状態が不安定で、人々は塗炭の苦しみをなめたが、戦国の諸侯はかえって富貴を極めた。しかし、彼らは富貴であればあるだけに、その勢力の増大をのぞむ一方において、長生を体得していつまでもその富み栄えた生活の永続せんことを願った。その長生の術を体得させるものとして登場したのが神仙思想である。

神仙思想は、おそらくさらに古くから発生していたであろうが、史上に姿をあらわすのはこの戦国時代であった。すなわち、山東半島の北部沿岸地方において、方士と呼ばれるものが長生の術とそれを体得して不老の境地にいるもの、存在を称えはじめた。これを神仙説というのであるが、次第に各地にひろがり、いろいろの呪術や雑多な民間信仰を習合した方術を手段として、ひろく民衆の間に信ぜられるようになっていった。[1]

という説明が、端的である。又、道教と道家の関係について

ただ道教を考える場合、注意しなければならないことが二つある。その一つは、道教と道家との関係である。道家とは老荘の思想というのであるが、この理論が道教にとりいれられ、ことに後世になって老子を道教の開祖として、その化身を太上老君と崇めるようになったことなどから、両者を同一視するのが普通である。[2] とのべておられる。

仙術と老子とのかかわりについて本田済氏は、「抱朴子[3]」の解説において

仙術に老子の道がどうして関わって来るか？けだし、長生のための体操、呼吸その他の技術は、老荘思想とかかわりなく老子、荘子その人より前から、医者や呪術師の手で試みられていたに違いない。ただそれらの技術を整理して文字に記そうというほどの人になれば、おのずとあとから理屈をつけたくなるであろう。技術を道にまで昇華させたがるのは、中国的思想の特色である。そうなると、最も附会しやすいのは、中心に具象的な徳目をもたない、中点が「無」である老子系の哲学であろう。

と論述された。

さて、このように民間信仰として発生した仙術を体系化したのが、葛洪の「抱朴子」である。葛洪は死に至る原因として、

損・老・百病・毒悪・邪気・和気・風冷

の六害を考え、これを防ぐ方法として

導引行気、還精補脳、食飲に節度あること、興居に節度あること、薬物を服用すること、精神統一、極天禁戒、符印を帯佩する

の八法を示している。[4] 更に積極的な長生の方法として、呼吸法、房中術（宝精）、服薬を挙げている。

又、入山の法則に従って、名山に入山し、穀断をし、仙薬を調合して服用する必要がある。

入山の術として

呪文・禹歩・方角・吉日・凶日・斎戒・祭・符・印・鏡等[5]に、留意しなければならない。

名山といわれていたものは、

華山・泰山・恒山・嵩山・太白山・終南山

など、二十数山あった。[6]

穀断は、腸を清くし、仙薬を服する為には、是非必要なことであり、穀にかわるものとして、松脂・松葉松実・桃膠などが用いられた。

仙薬は、仙人なる為には、重要なものであり、上・中・下の別があり、各々その効果に差異がある。丹砂をもってその最上のものとしている。

仙人の種類は次の三種が、その主たるものであった。

太清丹という最上の金丹を服し、天を主な住居とする天仙・仙薬を服して長生は保障され、仙術を心得て自在を得、名山

や世間にすんでいる地仙・仙薬のよきものを得ることができない為に、一度死して後に仙になる尸解仙[7]

ようするに、以上のべたような方法によって、不老長寿をはじめ、現世的なその他の欲望を達成することを目標とした術が、仙術であり、それを体現した人が仙人ということになる。

このような神仙思想の本朝への伝来は、極めて古く「古事記」をはじめとして、「六国史」「万葉集」などの中にも、散見せられるところである[8]。そして仏教と共に、現実生活の中に深く浸透していったものと考えられる。

さて、「今昔物語集」をみてみると、次に列挙したものの中に、何等かの形で、仙人に関連のある話が登場してくる。

巻一⑤
巻三②
巻五④⑤⑩㉑㉚
巻六㊸
巻十⑭
巻十一③㉔㉙㉜
巻十二㊳
巻十三①②③④⑫
巻十七⑯
巻五④　一角仙人、被負女人、従山来王城語第四
巻十一㉔　久米仙人、始造久米寺語第二四この二話は、仙人譚として著名なものであり内容的にも、おもしろい。それぞれ仙人が女性と接触をすることにより、その神通力をうしなう話である。

一角仙人の話は「法苑珠林」巻七十一・呵欲部第四の呵触欲の例としてあげられているもの[9]を原話としている。天竺に額に角一つ生いた一角仙人という仙人がいる。ある時雨で悪くなった道ですべり、立腹し、龍王をとらえ水瓶に入れてしまう。その為雨降らずして十二年を経過する。色々祈禱をするが効果なく、ある占師が、一角仙人の話をし、その験に及ばないことをいう。ある大臣が、欝頭藍仙が王大夫人に触れて神通力を失った話をして、この仙人を例外ではないだろうから、美女をあつめて試みようと提案する。早速に、五百人の美女を選んで、着飾らせ、車にのせて、一角仙人のいそうな山にむかわせる。女達は十人二十人と別れてさがしているうち、奥深い岩屋の側に一角仙人を発見する。仙人はおどろいたが、あまりに美しく今までに見たこともなかったので、愛欲の心をおこして一人の女に触ばう。すると、神通力はうしなわれ、龍王は水瓶を蹴破って空にのぼり、雨を降らす。一角仙人はその後女をおくって都（王城）に行くが、飛行することもできずに人々の失笑をかう。

以上の「今昔物語集」の話は、「法苑珠林」と大差はない。「法苑珠林」はむすびの部分で、五欲のつつしむべきを述べ

ている。ここでは五欲をよしとしない仏教の考え方が、仙人譚の中に、はいり込んできたことを知ることができよう。又「法苑樹林」が本生譚としてのべられていることも考えるとなおさらである。

久米仙の話は、久米寺の縁起譚として、久米仙を語っているものであり、神仙譚を語ろうとする意識はない。この久米仙の話は「本朝神仙伝」にあるが、更には「和州久米寺流記」の久米仙人経行事にみえるものである。両者を北較してみると、かなりの相違がみられる。特に終りの部分は著しい。

今昔物語集

其時ニ見レバ、大中小ノ若干ノ材木、併ラ。南ノ山邊ナル杣ヨリ空ヲ飛テ、都ヲ被造ル所ニ来ニケリ。

其時ニ、多ノ行官ノ輩、敬テ貴ビテ久米ヲ拝ス。其後、此事ヲ天皇ニ奏ス。天皇も、是ヲ聞給テ、貴ビ敬テ、忽ニ免田卅町ヲ以テ久米ニ施シ給ヒツ。久米、喜テ此ノ由ヲ以テ、其郡ニ一ノ伽藍ヲ建タリ。

久米寺ト云フ、是也。

其後・高野ノ大師、其寺ニ丈六ノ薬師ノ三尊ヲ、銅ヲ以テ鋳居ヘ奉リ給ヘリ。大師、其寺ニシテ大日経ヲ見付テ、其レヲ本トシテ、「速疾ニ佛ニ可成キ教也」トテ、唐ヘ真言習ヒニ渡リ給ケル也。

然レバ止事天キ寺也トナム語リ伝ヘタルトヤ。

本朝神仙伝

其の時に材木飛び来ること、飛べる鳥の如くなりけり。其の後忽然として失せ畢てつ。室に在る嫗、仙を恋ひて死りぬ。七箇日を経しところに、仙帰り来りと咒して、云へらく。

「生死限りあり、別離もしかり。我れ利生のために、汝と夫婦となれり。再び蘇生すること得て、一おなじき佛土に請ぜむ。」といへり。忽ちに蘇生して夫婦ともに西を指して飛び去り畢んぬ。其の仙室の跡、今に在りと云へり。

〈世の伝へごとに云はく、仙人は十一面観音、嫗は大勢至菩薩なりと云々。〉[19]

「今昔」は、明らかに久米寺の縁起譚という形式をとっている。「神仙伝」の方は、勿論神仙譚として、とりあげられている。しかし、「西を指して飛び去り畢んぬ」など、仏教思想の影響は顕著である。前述したように、神仙思想と仏教思想との融合の結果生じた仙人譚といえるのではあるまいか。

巻十三のはじめには、持経仙の説話がしるされている。

修行僧義睿、値大峯持経仙語第一

は、次のような説話である。山を廻り海を渡って国々に行き所々の霊験所をたずねている僧義睿は、熊野に参り、大峯を通り、金峯に行く途中で、道に迷い十余白日辛苦悩乱し、山中で微妙く造った僧房をみつける。そこにすんでいたのが、年は八十才を超えているが三十ばかりにしかみえない持経仙

であった。

彼は法花経を日夜に読誦し、鬼神、異類までその法花経の読誦を聞きに来ていた。そして翌朝水瓶を飛ばして、その水瓶に道案内をさせ、義睿を送ってくれた。ここでは、法花経読誦の功徳がつもり、経文のいくつかの文句が、現実に体現せられている持経者を仙人として描いている。不老長寿は仙人の属性であるにもかかわらず、その根拠を法花経の

得聞是経　病即消滅　不老不死

という言葉に求めている。ようするに、功徳つまり霊験あらたかな高僧を、仙人として把握している。

同じ十三巻の第二話

籠葛川僧　値比良山持経仙語第二

では、葛川にこもって修行する僧が、

穀ヲ断テ　菜ヲ食テ

懇に修行をしている。おそらく仙人になる為の修行であろう。夢で「比良山ノ峯ニ仙人有テ、法花経ヲ読誦ス、汝チ、速ニ其ノ所ニ行テ彼ノ仙人ニ可結縁シ」と気高き僧に告げられて、比良山に行き、洞の中に居る仙人に結縁する話である。その仙人は、もとは興福寺の僧で蓮寂といい、法花経の

汝若不取　後必憂悔

の文に、菩提心をおこし、山林に修行して仙人となった。

永ク本ノ寺ヲ出デ、山林ニ交テ仏道ヲ修行シテ、功至リ徳ヲ重テ、自然ヲ仙人ト成ル事ヲ得タリ

仏道を修行し、法花経読誦の功徳がつもり、仙人となったのである。そして、現世における理想的境涯を歩いているということができるだろう。

第三話の

陽勝・修苦行成仙人語第三

に、描かれているのは、次のようである。能登の国の陽勝（俗姓・紀氏）は、叡山にのぼり（十一才）西塔の勝蓮花院の空日律師につき、天台の法文を習い、法花経を誦持していた。

而ル間、堅固ノ道心発テ、本ノ山ヲ去ナムト

思フ心付ヌ、遂ニ山ヲ出テ、金峯ノ仙ノ旧室ニ至リヌ。亦、南京ノ牟田寺ニ籠リ居テ仙ノ法ヲ習フ。始ハ穀ヲ断テ菜ヲ食フ。次ニハ亦　菜ヲ断テ菓、菰ヲ食フ。後ニハ偏ニ食ヲ断ツ、但シ、日ニ粟一粒ヲ食フ、身ニハ藤ノ衣ヲ着タリ。遂ニ食ヲ離シヌ、永ク衣食思断テ、永ク菩提心ヲ発ス。然レバ、烟ノ気ヲ永ク去テ跡ヲ不留ズ。着タル袈裟ヲ脱テ松ノ木ノ枝ニ懸ケ置テ失ヌ。

このような手順を経、穀断をして陽勝は、仙人となるのである。その仙人となった陽勝の容貌は、

身ニ血、肉モクシテ異ナル骨、奇キ毛有リ。

身ニ二ツ翼生テ、空ヲ飛ブ事麒麟、鳳凰ノ如シ。

とある。飛行自在の通力を得た陽勝は、親の病気になり、苦しみ煩うに、飛び来って、法花経を誦して孝養したこと、不断念仏に参る途中で、浄観僧正の尊勝陀羅尼を誦する声を聞

いて、椙の木の上で聴聞していたが、尊くて高欄に降り、僧正がその気色を際して妻戸をあけると、部屋の中に、鳥のように飛び入って、談じたことなどを記している。木の上で仙人が誦経を聴聞したという話は、他にもある。巻十二㊳「天台圓久、於葛木山聞仙人誦経語第三八」では、圓久が葛山の椙の木の本に本尊をかけ、法花経を誦している時に、その木の上で、仙人が聴聞していた話をのせている。又仙人が木の上で、法花経を誦していた話（巻十三⑫）などもある。

これらの説話は、仙人というものは、現世における一応の境涯に達しており、人間とは比すべくもなくすぐれ、通力を体得しているが、仏教的目地から見ると、まだ完全に悟り切ってしまっているというわけではなく、衆生の一人である。従って法花経を読誦したり又聴聞したりして、仏道修行をしているものと考えられる。

釈迦仏の前生譚を説く

巻五⑭　国王、為求法以針被螫身語第十

は、次のような話である。

国王が王位を捨てて、山林に修行する時、一人の仙人が出て来て、

我レ、法文ヲ持テリ。汝ニ教ヘムト思フ何ニ

これに対して、国王が

我レ法ヲ求メムガ為ニ山林ニ修行セリ。速ニ可教

と答えるが、仙人はその条件として

若シ然ラバ九十日ノ間、一日ニ五度、針ヲ以テ其ノ身ヲ被突レバ、我レ貴キ法文ヲ教ヘムト。

国王はその言葉に従い

諸悪莫作　諸善奉行

をおそわる。この説話は、賢愚経巻一、梵天請法六事品を典拠とするようであるが、仙人は、賢愚経では「波羅門」となっている。又「三国伝記」では「仙人阿私多」とある。原典の賢愚経が「波羅門」としてあるのを、なぜ仙人としたか、というところに「今昔」編者の仙人に対する理解の仕方の一端が窺えよう。即ち、仙人をかけ離れた特別なものとしてではなく、仏教的な先達として把握しているようだ。従って、そこには、現世的欲望の達成を主眼とする所謂仙人の面影はない。同じ巻五㉚

天帝釈夫人舎脂音聞仙人語第三十

には、帝釈が提婆那延という仙人に、仏法を聞きに行った話が見える。この説話も同様に、仙人を仏法の先達として、理解しているものである。しかし、舎脂夫人が、帝釈にあまえて、戯れる声を聞くと、心が穢れて通力をうしない、凡人（普通の人）になってしまう。前述したように、女性に触れたり、愛欲の心をおこしたりすると、通力をうしなうのは、久米仙の場合をはじめ、仙人に共通するものである。又観音を念じて仙人になった話――清水寺の縁起として巻十一㉜にあるものである。小島山寺にすんでいる僧賢心は、聖の道を求

めて苦行怠ることがなかった。夢に「南ヲ去リテ北ニ趣ケ」と見、淀川をさかのぼって、滝の西の岸上に庵を発見する。その庵にすむ翁行叡は「心ニ観音ノ威力ヲ念じ、口ニ千手ノ真言ヲ誦」して、多くの年を積み、仙人となっている。その行叡が東国へ修行にいった後、賢心は同じように、真言を誦し、観音を念じて、三年を経て、田村麻呂がおとずれてきた時は、すでに神仙（仙人）になっていた――もある。

さて、仙人を考える場合に忘れてはならないものに、役行者がある。この説話は、「今昔」では巻十一（役優婆塞、誦持呪駈鬼神話第三）にある。ここでは、五色の雲にのって、仙人の洞に通ふ、とあるのみで、役行者を直接仙人とは、呼んでいないが、仙人であることは、

藤ノ皮ヲ以テ着物トシ、松ノ葉ヲ食物トシテ四十余年、彼ノ山ノ中ノ崛居給ヘリ

などよりしても、疑う余地は、あるまい。役行者のことは、周知のとおり古くは「続日本紀」に

役行者小角流于伊豆島　初小角住於葛木山、以咒術称外従五位下韓国連広足師焉　後害其能讒以妖惑　故配遠處世相伝言　小角能役鬼神　汲水採薪　若不用命即以咒縛之

とある。

更に「日本霊異記」「三宝絵詞」「本朝神仙伝」「元亨釈書」「私聚百因縁集」「三国伝記」等に見える説話である。「続日本紀」においては、咒術とあるのみで、それが如何なる性質のものか、はっきりしないが、「霊異記」になると仏教とのむすびつきが、顕著になる。本朝における神仙譚の源流は、この役小角の説話にあるのではなかろうか。それは「続日本紀」のようなものが、骨子となり脚色せられて、流伝したものであろう。

一応「今昔物語集」を中心として、仙人譚をみてきた。明らかになったことは「抱朴子」などに説く、中国の仙人とは様相を異にしていることである。「今昔」では、仙人というものに、独自の地位を与えずに、仏教の範疇の中に、位置ずけようとしている。即ち、法花経読誦の功徳が、積もって、仙人になるというようにである。そして、その仙人は、更に経を読誦したり、聴聞したりしながら、研鑽していく。あるいは、人に仏の道を、教えたりもする。

これは、「今昔」の作者（編者）の意識を物語っているものである。つまり、仙人という特別な範疇をたてずに、高徳な仏教修行者を仙人ととらえており、川口博士の高論のように、「今昔」が、唱導の資料集としての性格をもっていることを、証明することになろう。

註

①下出積与氏著「神仙思想」（吉川弘文館）一頁～二頁

②①の八頁

③「抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経」（中国の古典シリーズ　4）（平凡社）　五四八頁

④村上嘉実氏著「中国の仙人」（サーラ叢書・平楽寺書店）一六二頁および③の五五二頁等を参照した。「抱朴子」（至理篇）

⑤「中国の仙人」二十七頁～四十頁を参照吉日・凶日は、吉日か凶日を知ること。

⑥「中国の仙人」二十六頁

⑦「中国の仙人」七十三頁～八十八頁、仙人の種類を参照

⑧①の「神仙思想の日本的展開」等参照

⑨「法苑珠林」の本文は次のようである。

波羅奈国山中有一仙人　以仲秋之月　於澡盤中小便　見鹿麝麀合會　婬心即動精流盤中　麀鹿飲之即時有身　月満生子　形類如人唯頭有一角　其足似鹿　鹿當産時至仙人庵邊而産　是子是人　以付仙人而去　仙人出時見此鹿子　自念本縁知是已児　取已養育及其年大勤教学問、通十八種大経　又学坐禅　行四無量心得五神通　一時上山値霖雨泥滑　其足不便、躄地破其軍持　又傷其足便大瞋恚　以軍持盛水　祝令不雨　仙人福徳諸龍鬼神皆為不雨不雨故五穀五果盡皆不生　人民窮乏無復生路　波羅奈王憂愁懊悩命諸大寮集議雨事　明者議言　我得聞仙人山中有一角仙人　以足不便故上山躄地傷足　瞋祝此雨　令十二年不墮　王思惟言、若十二年不雨　我国了矣　無復人民　王即開募　其有能令仙人失五通属我為民者　當分国半治是国　有婦女　名日扇陀、端正巨富　来應王募　女問諸人　此是人非人　衆人言　是仙人所生　婬女言若是人者　我能壊之　作是語已　即取金盤盛妙宝物　語王言　我當騎此仙人項来　婬女即時求五百乗車　載五百美女　五百鹿車載種々歓喜丸　及持種々大力美酒色味如水　服樹皮衣行林樹間　以象仙人　於仙人庵邊作草庵而住　一角仙人游行見之　諸女皆出迎逆　好華妙香供養仙人　仙人大喜　諸女以美言敬辞問訊　仙人将入房中坐好床褥　與好浄酒　以為浄水　與歓喜丸　以為菓菰　食飲飽已　語諸女言　我従生已来初未得如此好果好水　諸女言　我一心行善故天與　我願得此好水好果　仙人問諸女言　汝以何故膚色肥盛　答言　我曹食此好果飲此美水　故肥如此　女白仙人言汝何以不在此間住・答曰　亦可住耳　女言可共澡洗即亦可之女手柔軟　觸之心動　便與諸女更互相洗　欲心転生　遂成婬事即失神通　天為大雨七日七夜　令得歓楽飲食　七日以後酒食皆盡継以山水木菓　其味不美　更索前者　答言已盡　今當共行　去此不遠　有可得處　仙人言　随意　即便共出　去城不遠　女便在道中臥言　我極不能復行　仙人言　汝不能行者　騎我頂上　當擔汝去女先遣信白王　王可観我智能　王勅厳駕出而観之　問言　何由得爾　女白王言　我以方便力故今已如此　仙人無所復能　令住城中好供養恭敬之　足吾所欲　拝為大臣　住城少日　身転羸瘦　念禅定心楽厭世欲　王問仙人　汝何不楽　身転羸瘦　仙人答王　我雖得五欲　常自憶念林間閑静諸仙游處　不能得去　王自思惟　若能強違其志為苦　苦極則死　本以求除早患　今已得之　當復何縁強奮其志　本以求除早患　今已得之　當復何縁強奮其志　即発遣之既還山中　精進不久　還得五通

⑩「本朝神仙伝」の引用は、古典全書（朝日新聞社）の「古本説話集」（川口久雄氏校註）に付載されているものを用いた。

⑪これは「法華験記」の「身中無血肉　有異骨奇毛　両翼生身飛行虚空　如騏麟鳳凰」と一致するものである。しかし「本朝神仙伝」には、「無翼而飛」とあり、対象をみせている。

⑫『本朝神仙伝』と神仙文学の流れ（「西域の虎」（吉川弘文館）所収）この博士の高論より、示唆された点は大きい。謝意を表したい。

—本学講師—